
創造の魔法使い

幻想主

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

創造の魔法使い

【ISBN】

N3687M

【作者名】

幻想主

【あらすじ】

突然魔法の力を手に入れた一般人浅倉玲時が様々な世界で頑張つていく物語。結構最強になります

プロローグ（前書き）

意味不明な設定などがあった場合教えてください

プロローグ

俺の名前は浅倉玲時。読書好きでめんどくさがりの普通の学生だった
別によく見る転生系の主人公みたいにゲームやアニメにそんなに知
識がある訳じゃない
けど好きなゲームなんかについてはことん調べたりした
そんな俺だったけど…

「聞えますか～？」

目の前にいる明らかに天使みたいな奴に出来つ事なんて無かつた筈だ
「聞えないのなら地獄逝きですよ～？」

「聞えています！」

あぶねえ～

いきなり地獄には送られたくない

「では貴方がなんでここにいるかを説明しますね～。簡単に言つと
貴方が根源と？がつてしまつたからです～」

…何だつて？

「根源…？それってアカシックレコードとか言つやつつの事か？」

「それのことです～」

Fateは俺だってやつた事あるから分かる
でも根源と？がつたつて

「何で俺が？」

「偶然ですか？」

は…？

偶然？

偶然で？がるつて運が良いのか？

「本来魔法などの神秘が存在しない世界で根源に触れる事も出来ません。

けど貴方は偶然？がつてしまつた

何か悪い事でもあるのか？

「触れる位なら魔法の存在を認識出来ない世界の人間だから問題は無いんです。けど？がつてしまつと

神秘を認識して魔法が使う事が出来てしまうんですよ。

魔法の無い世界で魔法を使うと大変な事になるので他の世界に行つてもらうんです～」

そうなのか

「けど俺は魔法なんて知らないぞ」

「今は私の力で抑えている状態です～。他の世界に行くと使える様になります～」

じゃあまだ魔法は使えないのか

「そろそろ説明するのに疲れたので飛ばします～」

「は？」

「貴方はこれから様々な世界を旅してもらいますから～」

「おい！如何いう事

言い終わる前に俺は意識を失つた

プロローグ（後書き）

根源は基本アカシックレコードみたいな全ての事が記録されている
といつ設定です

第一話（前書き）

初めての戦闘描写

上手く書けてるか分かりませんが変な所があつたら教えて下さい

第一話

あの後は空から落ちるなんて事は無く普通?に森の中にいた

(貴方の魔法は『創造』です。今はあまり上手く使え無いと思つので
そこで魔法の練習をしてみて下さい~)

そんな声が聞こえてきた

どうから聞こえてきたんだ?

まあいいか

でも創造か…

とりあえず色々実験してみるか

「凄いな、この魔法」

確認した事は

- ・武器、防具の創造（宝具などはBランクまで、無限に創造可能）
- ・魔力などの創造（自分の保有できる量だけ）
- ・能力付加

が出来る事が分かった

便利なのは魔力の創造だ

自分の保有できる分だけだがほぼ無限の魔力が得られるという事だ
能力付加は宝具では無い物に同じ位の力を持たせられるのは良い

これなら戦闘で死ぬ事は無い筈だ

まあサーヴァントなんかには勝てないと思うが
根源からの情報から殆どの武器なんかは理解した
だからといって自分から戦うつもりも無いけど
などと考えている間に周りの様子が変わってきた

「何だ？」

もしかして死徒か？

ここがFateの世界なら可能性はあるだろう
「創造」

一応武器として干将・莫耶を創り出しておく
周りの木などで視界が悪い
こんなので後ろから来たら…
「ツ！…！」

視線を感じて振り向きながら剣を振るう

今まで感じた事の無いような嫌な感触を感じながら下を見る
「なつ！」

そこには頭の無い人の死体があつた…

足音がして慌てて周りを見る

（囮まれてる！）

全て人の形をしていたが全然人の感じがしない
(不味いな、逃げ道が無い！)

死徒に囮まれている為、逃げられない
ここでこいつ等を倒すしか無い
俺が正面から戦つても勝てない。なら

「創造」

死徒の頭上に現れる剣

それら全てに死徒を殺すという能力を付加する
そしてそれを落とす

全て外れる事も無く死徒の体を貫いた
(今だ！)

死徒を完全に倒した事を確認せず走り出す
ただこの場から逃げるために…

「はあはあ…」

全力で走りやつと森から抜け出した
あの場に居る事が怖くて逃げ出した
そして思い出す

首しかない体、切り裂いた時の嫌な感触

「うつ！」

我慢できずにその場に吐いてしまった

「はあはあ…」

化け物とは言え自分の手で殺したのだと
気持ち悪い

その場に倒れるとすぐに気を失いそうになる
その時

「大丈夫か！」

焦った様な声を聞いて俺は気絶してしまった

第一話（後書き）

第一話（前書き）

アクセス数が1000になつて驚いた
こんな作品でも読んでくれる方に感謝します

第一話

「……ここ何処だよ？」

目が覚めたら見知らぬ部屋のベッドで寝てた
あれか？知らない天井とか言えばよかつたか？
起きて早々そんな事言える訳無いだろ

それにしても誰の家なんだ？

確認しようとして起き上がった時に部屋のドアが開く
「なんだ、起きてたのか。怪我はしていない筈だが大丈夫か？」

白髪のイケメンが声をかけてきた

…誰だよ？

話からして俺をここまで運んでくれた人だよな

「あなたは…？」

まず名前を聞いてみる

「オレの名前はバン。お前は？」

「浅倉玲時です」

「レイジか。森の入り口で倒れそうになつてたのを見た時は焦つた
ぜ。」

何での森に居たんだ？最近死徒が出るから誰も近づけない筈だつ
たんだが」「

え、そうなの？

普通の森だと思ってた

俺が魔法使えなかつたら死んでたのか…？

「なんでそんな事知ってるんですか？」
一応聞いてみる

何処かの魔術師かなんかだろう

「ああ、オレは元代行者だからな。今でも死徒を狩ったりするけど
な」

「は？」

元、代行者？

たしか教会の戦闘集団みたいな奴の事だよな
魔術協会とかと仲が悪い筈だ

つて事は俺ピンチ？

「元、ですか？」

動搖を隠しながら質問する

「ああ。命令されるのが嫌になつたから逃げた」

命令されるのが嫌つて…

なんで代行者になつたんだよ
ん？」

待てよ、代行者つて結構強かつたよな
なら鍛えてもらえるかも

この世界じゃ強くなないと死ぬからな

「あの…」

「どうした？」

「俺を、鍛えてくれませんか？」

「何？どうしてだ？」

俺は自分の事を説明する

「なるほど。魔法使いね」

「はい」

あの後、ついでに魔法が使えるから他の魔術師に狙われるかもしれないから

鍛えてほしいと説明した

「……」

これで断られたらどうしようか?

「いいぞ」

「へ?」

いいのか、そんなあつさり決めて

「いいんですか?」

「おう。面白そうだしな」

「ありがとうございます!」

俺はこの後の事を考えずに弟子入りが決定した。

第一話（後書き）

しばらくは戦闘が続くと思います

第三話（前書き）

自分で書いていて設定が崩れてきた…

第二話

バンに弟子入りした後に俺の実力を見るためにテストをした

内容はバンと戦つて五回攻撃を当てる事

俺は宝具や能力附加した武器でなら勝てると思っていた

けど負けた

まさかあんなに強いなんて思わなかつた

怪我をさせたくないから木の棒に刺し穿つ死棘の槍の能力附加

して攻撃したのに

回避したんだぞ

俺の創造が悪かったのか？

それともあいつの幸運が高いのか？

理由はよく分からなかつたが因果の逆転を防ぐ程の幸運は持つているはずだ

ありえないだろ

セイバーでさえ當たつたのに…

結果俺が当てた攻撃は一回だけだ

当たつたのは必中の弓で攻撃したのだけだ

刺し穿つ死棘の槍でさえ回避したのに弓は当たつた

俺は弱いのかと思ったがバン曰く俺は才能は有るらしいから大丈夫だろうと言つていた

「詠唱が駄目なのか?」

あの後俺は一人で考えてた

(衛富士郎は言葉は同じでも意味の違いがあったな)

トレス・オン
投影開始と
トレス・オン
同調開始

これと似たようにしてみるか

「創造だから…クリエイトかな」

安直とか言うなよ

これしか思いつかないんだから

「創造」
クリエイト

手には必中の弓がある

戦つてる時よりも完璧に創造できた

それにしてもこの弓はなんか馴染むんだよな

前から使っていたみたいに

「能力付加」
クリエイト

矢に能力を付加する

それを木に向かって放つ

矢は飛びながら十個くらいに増えて木に命中した

「よし、成功だ」

今のは矢が増えるという能力を付加した

一つ放てば十や二十に増えて当たる

命中の弓で放てば別々の敵に当てる事も出来る

取り合えず魔法がより良くなつただけでも大きく成長した
この調子で頑張れば強くなれるだらう
そうすればこの世界でも生きていけるはずだ

第三話（後書き）

今回出したオリジナルの宝具について説明

命中の弓
フェイルノート

トリスタンが使ったという弓

人間でも獸でも狙つた所に必ず当たるという

宝具としてのランクはBランク

放つた矢は狙つた所に命中する能力がある

本来の名前はアツキヌフォートというがこの作品ではフェイルノートと呼びます

第四話（前書き）

パンの台詞が無い…

第四話

俺の修行はバンと戦つたり、死徒を倒す事をしてたりする
バンと戦うのはとても疲れる
なんせ一日中戦う事なんだからな

それ以外だと色々な武器を扱うための練習だ
せっかく武器の創造が出来るのに剣しか使えないなんてのは勿体無い
だからどんな武器でも扱えるようにしておけどバンに言われた

で、今は死徒と戦っている訳なんだよ

「炎よ!
flamm e! feu er!」

手にした剣をかざして詠唱する
敵の中心で炎が爆ぜる

(今まで六体は殺したはず。あと七体…)

後退して敵から距離をとる

剣をかざし再び詠唱する!

「Wind! Zerschla ge es!」

風の弾丸が全ての敵を打ち抜く!

完全に殺したのを確認してから構えを解く

「予想以上に使えるなこの剣は

先の戦いで使つた剣を見る

見た目は刀身が様々な宝石で出来た短剣だ

宝石に魔力を込めて刻んである魔術を使う事が出来る

遠坂凜の宝石魔術だな

剣の銘はそのまま宝石剣とした

真似したとか言つなよ！それ以外思いつかないんだから！

まあ、あと八つの俺の切り札の剣がある訳なんだな

その内一つに纏めるかな。

テン・コマンドメンツみたく

第四話（後書き）

宝石剣の真似

主人公が魔術を使う為に創りだした剣
魔術師の杖の役割を果たすが剣としても一応使える
もつと強くなれば並行世界へいけるかもしれません

第五話（前書き）

誤字、脱字などがあつた場合教えて下さい

第五話

「はつ！」

剣を振るつ

狙うは首

一撃で仕留めるつもりで！

「遅い」

左の黒鍵で防がれる
そしてすぐに右からの刺突

「ぐつ！！」
それを何とか防ぐ
だが体制が崩れた

「そら、死にたくないれば防げよ
奴の持つ黒鍵が襲い掛かる
敵の剣は二つ

対抗するための剣を創造する！

クリエイト…
「創造！」

創りだすのは双剣

一つは炎のように紅く
一つは氷のように蒼い

炎と氷の相反する属性を持った剣
銘は蒼紅ノ太刀

名付けたのはバンだ

「はあ！！」

右の紅刃を振るひ
黒鍵とぶつかり合ひ度に黒鍵の刀身が燃えていく

「ちつ！」

舌打ちしながら後退していく

(逃がすか！)

「クリエイター

「創造」

すぐさま『必中の』^{フエイルノート}を創り出す

そして蒼刃を歪め矢と創りえる

「ふつ！」

矢
剣を放つ

空間を切り裂きながら進む

止められるはずが無い

そう思つていたのだが…

「デュランダル

「絶世の名剣！」

そう叫びながら剣を振る

俺の放つた剣とぶつかり合ひ剣

そして

「うおおおおお！」

防ぎきつた。だが甘い

完全に防ぐなら消滅させるくらいやらねばなー！

ブローカン・ファンダム

「壊れた幻想」

矢
剣が爆発する

爆発の余波によって見えないがおそらく氣絶だらつ
俺の創りだしたあの双剣はランクにすると△ランクを超えるかも知
れない宝具だ
いかにあの馬鹿でもこれはさすがに堪えただろう
ちなみにデュランダルは俺が貸した

今回は俺の勝ちとなつた

「もう勝てなくなってきたか…」

傷だらけのバンが呟く

「当たり前だろ。もう三年もやっているんだからな」

そう。俺がこの世界に来てからもう三年がたつたのだ
その間は本当に戦いしかなかつた

その中で何回か死にかけた事もあつたし、片腕を失つた事もある
失つた片腕は創造の魔法を応用して創りだした
まあ、その際に色々な能力を付加したけど…

それで分かつた事は肉体にも能力付加が可能な事だ
でもあまり多くの能力を付加すれば肉体が耐えられなくなるし、一
生続く能力付加となる
つまり永続的な付加になる。つけた能力は消せないという事になる

ちなみに今の肉体にはある宝具の能力を付加している

それは『騎士ナイトオブオーナーは徒手ハンドにて死せず』だ

これはかなり使えるからな

それ以外は肉体の基本的な能力を上昇させたくらいだ

そのお陰でステータスはほぼAランクくらいまで上がった

サーヴァントに勝てるかどうかは分からぬが

それ以外にあつた事といえば俺が魔法を使える事が協会とかにばれた事だな

それ以降は魔法使いとして認識された

なぜか二つ名までもらつた

クリエイタ

創造主クリエイタとか呼ばれている

けど魔法使いとして認められても命を狙われたりする

負けた事はないがめんどくさい

そんな事になりながらも俺はバンの家に居る

何だからといってバンは俺の師匠だからな

この世界の唯一の知り合いだし、離れたくないんだよな

バンが死ぬ事なんて無いはずだし

第五話（後書き）

なんと二年が経っていたという事でした
いや～主人公が強くなるにはそれくらい必要かなと思いまして
短いかもしれません
決して書くのが面倒になつたわけではありません

今回出た宝具は

蒼紅ノ太刀

炎と氷の相反する属性を持つ剣
長さは一般的な刀と同じくらい
ランクはA+くらい

騎士ナイトオブオーナー
は徒手にて死せず

手にしたもの自身の宝具として扱う宝具能力
どんな武器であろうと手にした時点でロランク相当の宝具となり、
元からそれ以上のランクの手に取れば従来のランクのまま支配下に
置かれる

絶世デュランダル
の名剣

決して折れないという逸話を持つ「不滅の名剣」
所有者の魔力が尽きても切れ味を落とさない名剣

主人公設定

浅倉玲時

根源と？がつてしまい別な世界へと送られた
根源であり人である

使える魔法は創造

それによつて武器、防具などを創り出し、様々な能力を附加させて
戦う

常に対魔力の能力を附加した防具を着ている

肉体の老化は完全に無効化ではないがほぼ無効化してある

ステータス	筋力	魔力
宝具	B	EX
幸運	A	EX
敏捷	A	A
耐久	A	A

スキル

直感 B

戦闘時、常に自身にとつて最適な展開を『感じ取る』能力
視覚、聴覚に干渉する妨害を半減させる

魔力放出 A

武器ないし自身の体に魔力を帶びさせ、瞬間に放出する事によつて能力を向上させる

対魔力 B +

魔術発動における詠唱が三節以下のものを無効化する
大魔術、儀礼呪法を以つても、傷つけるのは難しい

宝具

『クリエイト
創造』 ランクEX

あらゆる物を創り出す魔法

武器、防具などを創造する事が出来、能力を付加することも可能

『クリエイトオブソード
創造せし神の剣』 ランクEX

十の姿を持つ剣

それぞれの姿がほぼAランク相当の能力を持つ

- 第一の剣…白王
- 第二の剣…羅刹
- 第三の剣…ゲイル
- 第四の剣…蒼紅ノ太刀
- 第五の剣…麒麟
- 第六の剣…？？？
- 第七の剣…宝石剣
- 第八の剣…？？？
- 第九の剣…？？？
- 第十の剣…オメガ

第六話（前書き）

今日で二回目の投稿
テンション上がりまくって色々やつしまったぜー。

第六話

その日、俺はいつも通り仕事で死徒を殺して家に帰るつもりだつた
けど近くの町で死徒が出たつて話を聞いて少し遅れてもいいかと思
い倒しに行つた

そうして一日遅れて家に帰った

「何だ、これは？」

目の前に広がるのは炎

小さな森の中あつた家は燃えているだらう
なんせ森ごと燃えているのだから
それを呆然と見つめる…

「ぐう」

二〇一〇年

微かに聞こえた声の方に走る

いるはずだ。

あいつが死ぬわけ無いから

きっと敵を倒している

卷之二

「バン！！

そこで見たのは…

「はあはあ、帰ったのかレイジ…」

片腕が無く、足も完全に焼き焦げていた

体中から血を流し今にも死にそうな様子のバンがいた

「ば、バン…？」

「はは、まさか魔王に会つなんて思わなかつたぜ…」

微かな声で呟く

信じられなかつた

あんなに強かつたバンが死にそつになるなんて

「いいが、レイジ。早くこの場から逃げる。奴にはお前はまだ敵わない。

すぐに離れる

そんな事出来る訳がない

この世界で一人しかいない俺の味方

バンがいなくなつたら俺は…っ！

「そんな顔すんなよ。なにも泣く事ないだろ」

バンの手が俺の頭にのせられる

「いいが、お前は俺の弟子だろ？ だったら師匠の敵討ちはもっと強くなつてからにしろ。

まあこんな事言つのも悪いけどな。けどこんな風に言わなきゃ引かないだろ、お前」

… そうだろう。何も言われなければ敵に向かうだろう

「な?だからやひは逃げる。」

でも、俺には……

「しかたねえか……
え……？」

胸に手が置かれる

その手が握っているのはいつか俺が贈ったペンドント……

「それは？…………まさか！」

「じゃあなレイジ。楽しかつたぜ」

転送用の魔法道具！

「バン！」

必死で手を伸ばす

けれどその手は届く前に消え失せる

そして森は完全に燃え尽きた……

第六話（後書き）

はい、バンが死にました
結局最後までまともに会話できた描写がなかつたな…
この後は数年くらい進みます
またかつて思いますが、すいません
こうしないと続きが書け無いのです…

第七話（前書き）

超グダグダになりました
なぜこうなった…

第七話

剣を振るう

唯、何も考えずに振るう

何度も何度も振るう

何体殺しただろう

どれだけ探しただろう

あの日から俺の目的はあいつを殺した魔王を殺す事
それからは魔王が現れたと聞いたら何処へでも行つた

たとえ現れなかつたとしてもだ

でもいたのは死徒だけだった

いや、あの時の魔王が生きているかも分からぬ
それでも探す

絶対に見つけ出す

手に持つ刀で切り裂いていく

今戦っている死徒はかなり強いらしい
だが、それでも俺は負けない

「ふつ！」

一撃

それだけで相手は死ぬ

ここにもいなかつた
ならまた探すだけ
そう思い歩き出す

「お前が、魔王を探している者か」

行き成り声が聞こえた

「つ！！」

刀を構える

声の主は見えない

(何処だ、何処にいる……)

「そこ！？」

自分の直感を信じ何もいらない所を切る

「ぐつ！？」

見つけた！

相手の首を狙い刀を振るう

「くつ！！」

だが直前で止める

こいつには聞きたい事がある

「魔王を知っているのか」

今相手の命を握っているのは俺だ
知らないのなら殺すだけだ

「知っている

「何処にいる」

「いずれここに現れる。いい加減嗅ぎまわられるのは鬱陶しいぞう
だ」

奴は笑いながら答える

俺はその首を切り殺した

「そうか…」

笑みが浮かぶ

もう何年も探してきた魔王がここに来る
やつと殺す事が出来る

そして感じる強大な力
それが目の前に現れる

「お前が私を嗅ぎまわっていた者か。これはまた、随分と若い者だ
つたな」

来た

今すぐ殺したい気持ちを抑えて質問する

「お前が、バンを殺したのか？」
「一々殺した人間の事など覚えておらん。だが、いつか戦った代行
者は覚えておるぞ」

頭が真っ白になる

「あれは強かつた。今まで私が戦つてきた中でも一番の強さだった。
だからこそ、じっくりと殺してやったがな」

もう奴の言葉は聞こえない

頭にあるのは、唯田の前のコイツを殺す事だけ！

「はあああ！……」

刀で切りかかる

だが防がれる

「貴様は何のために戦う？」

決まっている

「復讐だ！……」

「羅刹！！」

刀の真名を叫び、力を解放する

「ぐつ！？」

奴が防いだ腕^ヲと切り裂く

「消えろ！！！」

奴が叫ぶと同時に目の前に炎の塊^がが現れる
向かつて来る炎を俺は

「はあ！！！」

切り裂く！

「何！」

マーブルファンダズム

真祖の空想具現化^{マーブルファンダズム}も切り裂く
そのまま奴に切り掛かる！

「人間が！！！」

奴が残つた腕を振るう

其れだけで俺の体は重さなど無いかのように吹つ飛ぶ

「がはつ！」

血を吐く

相手は魔王

この世界で最も強い真祖が全力を発揮している状態だが負ける訳がない

羅刹を変化させる

俺の切り札

第十の剣へと変わる

白き剣

魔剣でもなく聖剣でも無い

全てを消滅させる神の剣

それがこの剣

「the sword of the end」

相手を貫く

剣が光を放ちその存在を消滅させていく

魔王は一瞬でこの世界から消えた…

「はあはあ」

倒れこむ

流石にこの剣の発動は堪える

だけど殺した

バンを殺した魔王を

けど俺に目的は無くなつた
如何すればいいんだろ？

「単身で魔王を殺すとなつて。面白いな」

行き成り田の前に現れる老人
手に持つのは宝石の剣

「魔法使いか…」

「お主もじやふつ
確かに

「何の様だ」

「お主に仕事を頼みに来たのだ。」

仕事だと？

「墮ちた真祖を殺してもらおうと思つ

俺はまた魔王を殺すのか
けどまあ

「いいか

他にやる事も無い
なうぢやつてしまつ

「やつが。なります。ある所へ送る。それで魔王の情報を聞く事
が出来る筈だ」

そんな言葉と共に俺の意識は消えた

第七話（後書き）

ついに？魔王を殺しました
え？早いって？

長引かせても駄目かな～と思いまして
次回からまた魔王殺しが再開します

宝具紹介

羅刹

通常は切れ味の良い刀だが真名開放すると魔術、魔法なども切る事が出来る

オメガ

白き神剣

この剣で切られたモノはその存在を消滅せられる

玲時の切り札

衝撃波でも消滅させる事が出来る

玲時でもこの剣の存在を維持させてるので魔力の創造があまりできず
発動できたとしても使用者までダメージを受ける

第八話（前書き）

超適当な駄文になつた

第八話

目が覚めたら真祖に出会つた
咄嗟に剣を創造した俺は悪くない
その後に殺されそうになつたが

色々説明されて、彼女が魔王の情報をくれるらしい
俺の仕事は魔王を殺す事
单纯だ

彼女の名前はアルトルージュ・ブリュンシュタッドというらしい
そんな奴いたかなーと記憶を掘り起こしている時に紹介された奴が
いる

リイゾ＝バール・シュトラウトとフィナ＝ヴラド・スヴェルテン
黒騎士と白騎士と呼ばれているらしい

リイゾには剣術を教えてもらいたいと思つた
仲良くなれそうだ

だがフィナは駄目だ
俺を見る目が危ない

なるべく近寄らないようにしたい

そして死徒二十七祖の第一位がいた事に驚いた
死ぬかと思った

プライミニッシュ・マーダといいうらじい

人類に対する絶対的な殺害権利を持つという
勝てるわけ無い

ここでの暮らしは魔王を殺しに行くかここでのんびり過ごすことに
なった

十年もすると多重次元屈折現象が出来るようになった
擬似的な燕返しも出来る

最大で五つ同時に放てるようになつた

魔王も昔より楽に殺せるようになつた

何でも俺に出会うと死んでしまうという噂があるらしい

魔王だったら殺すが人間はあまり殺さない

流石に抵抗がある

そしてそんな生活が一十年も経つた時にある情報が俺に届いた

第四次聖杯戦争が開始されたという情報だった……

第八話（後書き）

次回から聖杯戦争に関わっていきます
アルトとかの会話が無いのは口調などが分からぬからです…
自分、月姫とHollowは未プレイですから書けないと 思います

第九話（前書き）

今回から聖杯戦争に絡んでいきます
キャラが上手く書けるか分かりませんが変だと思いましたら教えて
ください

第九話

聖杯戦争が開始されたと聞いた俺はすぐに日本へ行く事にした
アルトに色々言われながらも何とか日本へたどり着いた
帰つたら死ぬかもな：

「行方不明事件か…」

冬木に着いた俺が聞いたニュースに取り上げられていた事件だ
恐らくキャスターの仕業だろう
という事はセイバーとランサーは戦つた後か？

記憶が不確かだな
ま、いいか

たしかアインツベルンの城に行く途中にセイバーとキャスターが出
会う筈だ
その時にでも会ってみるか

夜道で人が殆ど居ないとはいえ百キロもだして走るのはどうかと思つ
だがもう少しでキャスターが来るはず

その時に襲撃するか

「あれか…」

創造で弓を創りだして置く

キャスターの叫び声が聞こえる
かなり響いているんだが結界でも使っているのか?
誰か気づいてもおかしくないだろうに

「さて、そろそろやるか」

弓を構える

狙うはキャスター

「ふつ！」

矢を放つ

だが、ぎりぎりで避けられる

キャスターが消えてからセイバーの下に歩き出す

先程の攻撃を警戒してか周りに注意を払っていたのですぐ気づかれた

「誰だ！」

セイバーの声が響く

「危ないと思い助けたのだが、迷惑だったかな？」

セイバーはすぐに剣を構える

マスターは警戒しているのかセイバーの後ろに下がる

「何者だ、答える」

声に殺氣を含ませて質問してくる

「何者、か。そうだな、俺は魔法使いだよ。騎士王殿」

セイバーとそのマスターが驚く
セイバーの真名が分かった事に驚いたのか、俺が魔法使いだという
事に驚いたのか、どっちだろうな

「魔法使いだと…？」

どうやら後者のようだ

「後ろのマスターは聞いた事が無いか？創造主と呼ばれていたのが
が」

自分の二つ名を言つてみる

「創造主…つーセイバー離れて！」

マスターが叫ぶ

「？、何故ですアイリスファイール

「本当に創造主ならしくセイバーでも…」

その言葉を如何思ったのか

行き成りこちらに殺氣を向けてくるセイバー

「例え魔法使いだとしても魔術を使うなら私は負けません」

その自身は自らの剣の腕からか。
対魔力からか分からんが

「それは有り得ないなセイバー。俺が負けるというのは絶対無い。
それが騎士王だとしてもな

さて、どうなるかな……？

第九話（後書き）

主人公行き成りセイバーを挑発
次回はセイバーと戦う事になりそうです

第十話（前書き）

セイバーの性格がおかしいと思しますが気にしないでほしいです…

第十話

「はあ！」

セイバーが剣を振るう魔力放出による底上げされているとはいえかなりの速さだが俺も剣で切り返す

「つー」

そのまま鎧競り合いの状態になる

「行き成り襲つて来るとはな。礼儀を知らんのか

「ふざけた事をー」

だが相手はセイバー
徐々に押され始める

(やはり強いな…。だが負ける事は無い)

そうだ、負けるはずが無い

あらゆるモノを創りだす俺がセイバーなどに負ける訳が無い！

「はあー！」

勢いを一転させ切りかかる
この剣は『白王』

第一の剣であり全ての剣の原典

故にこれは俺の能力付加を何度も重ね掛けができる

付加させた能力は魔力を奪っていく能力と

竜殺し

セイバーは竜の因子を持っているからこの能力を付加させている

「くつ！ がはつ！」

俺の一撃がセイバーを斬る

魔力を奪われ力が発揮できない状態に竜殺しの能力だ
動きが鈍つて攻撃をかわせなかつたか

だが直感によつて致命傷は避けたらしい

「はあはあ…その剣は…」

予想以上のダメージに驚くセイバー
だが剣の能力に気づいたらしい

「察しの通りこの剣は竜殺しの効果がある。君には効くだろう?...」

笑つて答えてやる

「はあはあ…」

しかし剣を構えを解かないセイバー
まだやる気か

「駄目よセイバー！逃げて！」

マスターが叫ぶ

ま、十分戦つたしもういいか

剣を消す

「勘違いしているようだが俺は戦いに来たわけでは無い。少し話したい事があつて来たんだ」

そう言つとセイバーとマスターが驚いた顔をした

「……分かりました。戦つ気が無いのでしたら剣を收めます」

セイバーが剣を收める

どうやら聞く気にはなつたらしいな…

第十話（後書き）

セイバーに勝つてしまつた玲時君
まあ、セイバーは片手しか使えない状態だし
竜殺しとかの能力を付加させてんだから勝てると思いました

宝具

『白王』

第一の剣であり『創造せし神の剣』の原典となつた剣
その能力は能力付加を何度も重ね掛け出来る事
通常の武器や宝具などには多くの能力は付加できないが
この剣はどんな能力でも付加できる

第十一話（前書き）

短いです
書く暇がない…

第十一話

今回の聖杯戦争での目的がある

一つは自分とサーヴァントの戦闘能力の確認
自分がどれ位サーヴァント相手に戦えるか
記憶が薄れてきて分からなくなつたサーヴァントなどの情報を得る
ためだ

これについてはどこかのマスターに協力をさせてもらえばいい
切嗣なら俺の利用すると思い協力を申し出る事にした

もう一つは興味本位

ただ記憶にある事だつたから実際に見てみたいと思ったから
それだけだ

「私達に協力するだと？」

「ああ。俺はサーヴァントという存在がどれ程の能力を持っている
のか。

それに対して自分はどれ程戦えるかを知りたいだけだ」

「……」

「悪い話では無いだろ？」「

サーヴァントと同等の能力を持つ者が一人増えるだけで戦力は上がる
からな。

俺はサーヴァントと戦えるのならどんな事でもこよつ

「……」

随分悩むな

切嗣なら受けたが違ったか？

「マスターからのご承を得ました。こちらの命令には逆らわない事が条件ですが」

びつやら良かつたらしい

これで目的の一つは達成できるな

「分かった。これからよろしく頼むセイバー」

手を差し出す

「？」

だがセイバーはよく分かつてないようだな
分かると思つたんだが

「握手だ」

「え？」

「これからは共に戦うのだ。その為に、な

「…分かりました。よろしく頼みます」

セイバーと握手を交わす
一応セイバーには信用された様だな
あとは何となるといいな
：

第十一話（後書き）

セイバー陣営と協力してサーヴァントと戦おうとこう目的
これからはどんどん戦っていきます
目標はギルガメッシュをボコボコにする事（笑）

第十一話（前書き）

微妙な出来

切嗣の口調が分からぬ

第十一話

俺は現在アインツベルンの城に居る

あの後は切嗣の事を紹介されて、今後は切嗣の命令に従う事となつた
勿論強制ギアスを使ってな

いざとなつたら破戒ルールブレイカーすべき全ての符を使えばいい

そして今は切嗣達が作戦会議をしている

内容はキャスターを倒すという内容のはずだ

俺は一緒に部屋の外で待っているのだが…

中では揉めているようだ

セイバーの怒鳴り声が聞こえる

それを聞き流して別な事を考える

(現状は全てのサーヴァントが生き残つてゐるはずだ。
だとすれば最初に消えるのはアサシンかランサーのどちらか?)

最後の戦いでは三騎士とライダー、バーサークが残つていたのは覚えている

ならば俺が倒す事になるのはランサーかキャスターか
まあ、どちらでも負ける事は無いが対策を立てておくに越した事は無い

そんな時、アイリスフィールが侵入者を感じしたらしい
俺達はサロンにある水晶球から侵入者の映像を見ていた

「こいつが、例のキャスターかい?」

切嗣がアイリスフィールに尋ねる

「ええ。でも…何のつもりかしら?」

アイリスフィールの言つとおりキャスターは何故かは分からぬが子供達を連れている

「アイリ、奴の位置は?」

「城から北西に一キロと少し。深入りしていく気配は無いわ

敵は結界のギリギリの所をうろついているらしい
深入りせずに来ない様子を見るところは…

「罷だな」

「ああ、そうだね」

切嗣は冷静に返す

「で、どうする? 誘いに乗るか?」

「…じゃあ魔法使いの実力を見せて貰おうか」

やつぱりか

「了解した」

すぐさま俺はキャスターの所へ行
きて、ここで実力を見せようか

「マスター、なぜ彼を行かせたのですか。
彼で無くとも私が行けば…」

セイバーは納得出来ていないう�だった

「それは彼が負けると思うからかい?」

「いえ、ですが相手はサーヴァントです。いくら強くてもキャスターのクラスの奴には…」

確かにいくら強くても相手は英雄と呼ばれた人物
しかもクラスはキャスター
勝てないと思うのも無理はない
だが、仮にもセイバーを圧倒した者がキャスターなどに負けるだろうか?

「別に勝てずにここで死んでもかまわないよ

切嗣は如何でもいいように返す

「なつ……」

セイバーが驚きの声を上げる

「彼がここで死んでも僕達には全く被害が無い。
そうじやなくてもキャスターを相手してくれる内に他のマスター達
を倒す事が出来る」

切嗣の言つている事は正しい

協力関係だが命を守る事など契約には入っていない
しかも玲時の目的はサーヴァントと戦つ事だ
切嗣は契約を守つてゐる

仮に行かないと言つても、あらの命令は聞くといつ強制^{キヤス}が掛かっているから

結局は行く事になる

たとえ死んでもこちらに被害が無く、他のサーヴァントとも戦つてくれる道具
そんな認識しか切嗣には無い

「マスター、貴方は…」

「切嗣、どうやら新手が来たみたいよ」

「分かった、アイリはセイバーと同じ元居てくれ。舞弥、護衛を頼
む」

切嗣はセイバーと話す氣はもう無いらし

「分かりました」

夜の暗闇の中、炎が燃え上がる
森ではすでに戦いが始まっていた…

第十一話（後書き）

戦闘は次回という事で
まだ考え中です…

第十二話（前書き）

おかしくなつたかも

第十二話

俺がキヤスターを視界に捉えたときには既に五人ほどの幼児の死体があつた

「…」

いくら関係無いといつても子供が死んでいる姿を見れば怒りが生まれる

今すぐに奴を殺したいという感情を押さえ込み話し掛ける

「…なぜ子供を殺した」

これだけは問わなければならない

「ふふ、貴方には分からぬでしょ。この子供達が味わつた絶望が。

ですが、この程度など悲劇には値しませんよ。ジャンヌを喪つてより重ねてきた私の所行に比べ…」

奴の言葉は聞く価値も無い
だが、子供を殺したのが許せない
無関係な者を理不尽に殺す事は…

「はあ…」

蒼紅ノ太刀を創りだし斬りかかる
刃は奴の首を

「危ないですね」

後ろから伸びて来た触手に阻まれた

「何！」

咄嗟に後ろを向き触手を切る

何処からこれを召喚したか確かめる為に

「なつ！？」

子供達の体を破り、海魔が現れる

「子供達の血肉を介して召喚しました。気に入りましたか？」

奴は俺の驚く顔を見て笑っている

子供達は最初からこの為に連れて来られたのか

冷静になる

奴を倒す為に必要な力を創りだす

嵐を巻き起こしながら剣が完成する
風の力を司る剣を握り締める

「…切り裂け」

そう呟く

それだけで周りにいた海魔は風の刃で切り裂かれる

「キヤスター…」

「まだですよ

だが海魔を何度も召喚してくれる

敵の数は減らない

だが、構わない

敵がどれだけ面おとし全てを殺しきへし

奴を殺す！

「はああー！」

剣を一閃

それによつて巻き起された風の刃は海魔を切り裂く

「ふつー！」

敵の中心に飛び込む

「吹き荒れろー！」

俺の体を中心にして風が吹き荒れる
周りにいた全ての敵を薙ぎ払う

「貴方に構つている暇は無いのですけどね。私は一刻も早くジャン
ヌに会わなければなりませんから」

「待て！　くつ

キヤスターが城に向かう

止めようとするが海魔に邪魔される

「くそつ！」

必中の弓を創りだす

矢に魔の属性を持つものを消滅させる能力
さらに矢が増える能力も合わせる

「必中フェイブルーの弓！」

矢を放つ

対象は全ての敵

寸分の狂いも無く全ての敵に命中する
魔の属性を持つていてるから海魔は消滅していく

「逃がすか！」

もう一度狙いを定める

キャスターを殺すために矢を放つ

しかし、それは海魔に阻まれる

「くつ」

その時キャスターに赤の槍が襲い掛かる

「何つ！？」

だがキャスターも寸での所で避ける

「大丈夫か、怪我は無いようだが

赤と黄の魔槍を持つサー・ヴァント

「ランサー！」

なぜ来た

ここに来たという事は…

「キャスターを討ちに来たか」

「ああ、サー・ヴァントではないのによくここまで戦った。本来はここでお前を始末するようだが…」

ランサーが魔槍を構える

「休んでいろ。俺が倒す」

そう言った

だがそれは駄目だ
奴は俺の手で殺す

「いや、俺はセイバーの協力者だ。俺も協力する。奴は必ず殺す」

弓を構える

「邪魔です！ 私はすぐにジャンヌの所に行くようなのです

キャスターが螺旋城教本を構える
ブレラーティーズスペルブック

「行かせない、貴様はここで殺す」

第十二話（後書き）

駄目だ…

主人公の性格が分からなくなってきた
まあ、大丈夫だろう

宝具は詳しく決めてから紹介します

第十四話（前書き）

キャスターとの戦いはもう少し続きます

第十四話

「…埒が明かんな」

ランサーの言葉は最もだ
あれからかなりの数の海魔を倒したが減る気配は無い
足元には夥しい程の海魔の姿がある

「確かに。ならばアレを攻撃するしかあるまい」

視線の先には羅涇城教本ブレラーティーズスペルブックがある

破戒すべき全ての符なら無効化できるか?
…だがここで使う訳にはいかない
まだ使うべき所がある
ならばランサーか

「ランサー、あの宝具をどうにかできるか?」

ランサーに問う

「ああ、俺の破魔の紅薔薇ガイ・ジャルグなら一撃でもあたえればいい」

ランサーが紅き魔槍を構えて言つ

「そりが、なら任せる」

弓を構える

「なに?」

矢に魔力を込める

能力は魔を消滅させる能力

「道を開く、一撃で決める」

ランサーは意味を理解して笑う

「任せる」

矢を放つ

矢は無数の海魔を消滅させながら進む

そしてキヤスターの目の前に来たときに言葉を言つ

ブローケンファンダズム
「壊れた幻想」

瞬間、矢が爆発する

宝具としては最低ランクとして創り出したから威力は高くない
だが視界を奪う事はできる

「くつ、こんなもので…」

キヤスターの声が聞こえる
場所は分かつた
後はランサーの仕事だ

「つまおおおお……」

ランサーが駆ける
狙いはキャスターの宝具

「なつー!?」

キャスターの驚く声が聞こえる

「抉れ、ゲイ・ジャルグ破魔の紅薔薇！！」

ランサーの魔槍がキャスターの宝具を貫く

そうして宝具が無効化された事により、魔力供給で現界していた海魔も依代である血に戻る

「貴様ツ！」

キャスターが怒る

だが奴の宝具は無効化された

「これでチエックだ。キャスター」

第十四話（後書き）

原作のセイバーとランサーのよつたな感じになりました
説明は大丈夫だつただろつか・・・

前回の宝具

ゲイル

風の力を持つ剣
所有者は敏捷が1ランクあがる
さらに風による魔術、攻撃なども1ランクあがる

第十五話（前書き）

かなり遅くなりました
忙しかったんです・・・

第十五話

「しまつた……、完全に忘れてた……」

俺の前にはライダーとそのマスターがいる
場所は……

「ライダー、何をしに来たのだ」

そう

アインツベルンの城だ

あの戦いは結局はキャスターに逃げられた
ランサーのマスターが襲われたらしい
動搖した隙を突かれて逃げられた
まあ、逃げようとする隙に一撃喰らわせてやつたがな

マスターは切嗣に襲われたのだろう

俺とランサーがキャスターと戦っている内にマスターを襲つたようだ

ま、予想はしていたが

セイバーはずつとアイリスフィールの護衛だったそうだ
連れて行つたら大変な事になるからな
その後は城に籠りキャスターが再び来るのに備えた
だがあの後からキャスターの足取りは掴めない

そうして日が過ぎていった今日

ライダーがここに来たといふことだ

ていうか

「酒盛りで真剣勝負になるのか？」

謎だな

奴のマスターは常識がある奴らしい
まあ、なんだか苦労する感じがする

今回俺は酒盛りはしない

王などではないからな

というかあのギルガメッシュが来るんだ

こじはセイバーに任せるべきだ

なんだかあちらの雰囲気・・・特にセイバーの感じが悪い
酒盛りでみんなになるんだな・・・
不思議だ

もう少し見ていたいがどうやら客が来たらじい

「どうする、アイリスフィール？」

今回は切嗣がいないから俺への命令権は彼女にある

「見張られてたわけね・・・、戦えるわね、レイジ」

「当然だ」

「な、何いってんだよ！？」

ライダーのマスターが叫ぶ
何かおかしな事でもあったか？

「どうした、ライダーのマスター」

「どうしたじゃない！ 人間がサーヴァントに敵つはず無いだろ？
！」

「ふむ・・・」

確かに

人間ではあれらに勝つ事はほぼ不可能だらう
だがな

「何事にも例外はある、もしかしたら英靈に勝つ事ができる人間が
いるかもしれないぞ」

そんな事を言いながらアサシンの前に跳ぶ

「すまないがお前達の出番は無いぞ」

酒盛りをしていた奴らにいう

「なんじゃ、お主があれの相手をするのか？」

ライダーが聞いてくる

「ああ、アサシン如きに勝つ事など雑作も無い」

「ふむ、だがあれは人が敵うものでは無いぞ」

剣を創り出す

「お？」

「別に絶対敵わない事は無い。つまくやれば勝てる相手だ」

自信を持つて答える

「まあ、そこで見ていろ」

そつと敵の中に駆けていく

「ふつ！」

目の前のアサシンを切り裂く

だがアサシンからすれば大したダメージでもない
一体殺したところで無数のアサシンがまた襲ってくる

放たれる短刀ダーツを弾き、そして敵を切り裂いていく

動きは素早いがそれだけだ
セイバーの様な力も無い

取るに足らない相手だ

だが数が多い

一體一體斬つていたら時間の無駄だ

一気に勝負を決める

「奔れ、『麒麟』」

剣の真名を呼ぶ

同時に剣から雷が迸る

そして・・・

一瞬にして数十体のアサシンが切り裂かれた

「ツー?」

アサシンの驚きが伝わる

すぐさま俺から離れ様と後退するが

「遅い」

そんなものは意味も無い

どれだけ離れ様とこの狭い場所では逃げられない

そこからは一方的な戦いだった

正体不明の攻撃に惑い、逃げるアサシンを殺しきった

そんなに強くなかったな

「面白い奴だなお主は！」

笑いながら背中を叩くライダー
地味に痛いんだが・・・

「何の様だライダー」

「人でありながら英靈を殺し、あのよつた剣まで持つ。お主、余の
臣下にならんか？」

突然の勧誘
だが動じない俺

「悪いが誰かの下につくような事はできない。命令などを聞くのは
嫌なんだ」

こちらに目的が無い限りはな

「命令なんぞせんから、臣下にならんか？」

「しつこいな・・・

「ならんよ」

「ふむ、どうすればいいかのう・・・」

かなり本気で考へてゐる様なライダー

馬鹿か？

「まあ、それは後で考へるか。それとさつきの攻撃はビシヤッたんだ？」

「ん？ ああ、あれは魔法だよ」

「魔法？」

怪訝な顔をして聞いてくるライダー

「ああ、あれの能力は雷を操る能力ともつ一つ・・・使用者の体を電気と化して高速移動を可能とする能力だ」

あれは雷を能力を持つ剣を創り出していたら偶然できた能力だが長時間使用すれば肉体が耐え切れず消滅する危険もある

「魔法だと？ お主魔法使いなのか？」

「ああ、創造主と呼ばれている」

今思つとかなりイタイ一いつ名だな・・・

「ほお、魔法使いか。もつと欲しくなったぞー！」

なんだか余計に好かれてしまったようだ

「そこ」の雑種

・・・最悪だな

「何か用かアーチャー」

嫌な顔を隠さず振り返る

「貴様のその剣を我に献上しろ」

なんて笑いながら言った

「・・・は?」

「「お前の世の全ては我のモノだ。なればその剣も我のモノだ」

意味が分からん

「お前の宝物庫にもあるだろ似たようなものが」

「無い、だからそれは我のモノだ。すぐさま献上すれば命は残して
やる」

・・・かなりの暴君だな

第十五話（後書き）

ギル様はこんな感じでしょうか
まあ変な口調だつたりしたら教えてください

宝具紹介

『麒麟』

雷を操る能力と使用者の体を電気と化して高速移動を可能にする能
力がある
二つ目の能力は長時間使用すると肉体が耐え切れず消滅してしまつ
危険がある

第十六話（前書き）

週一での更新になります
すいません

第十六話

田の前のアーチャーをどうしようか考えてみる

倒すか？

いや、まだ駄目だ

最後の戦いは見たいしな

逃げる？

それが良いかもしねない
でもここから逃げても追われそうだな・・・

剣を消すか

それで諦めてくれるといいがな

手にしている麒麟を消す

「あの剣は消滅した。あまり長くは存在をせん事はできないんでな

まあ嘘だが

「ふん、もう一度創ればいい」

それでも諦めないアーチャー

「創り出したとしても時間が立てば消えるぞ」

「ならば消えぬモノを創り出せ」

「イツ・・・
仕方ないか

「ほり、これで消えない筈だ」

剣を創り出してアーチャーに投げ渡す

「最初から素直に渡せば良かつたものを」

満足そうに眺めてから剣を宝物庫に入れた

「さて、俺は戻るとするか」

「イツと呟るとイライラする
早く立ち去りたい

後ろで騒いでいるが気にしない

第十六話（後書き）

今回は短かったです

ギルガメッシュはこんな感じの性格だと想つ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3687m/>

創造の魔法使い

2010年10月9日12時42分発行